

#### ④研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第31回文化財の保存修復に関する国際研究集会（保06）	保存修復科学センター	67
平成19年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（美05）	企画情報部	68
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修06）	保存修復科学センター	69
国際文化財保存修復研究会（*セ01）	文化遺産国際協力センター	70
総合研究会（情）	企画情報部	71
企画情報部研究会（情）	企画情報部	71
保存修復科学センター研究会（保）	保存修復科学センター	72

- \*注 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する研究（①修06）の一環として実施した。
- ・国際文化財保存修復研究会は、文化財保存政策の国際的研究（②セ01）の一環として実施した。

## 第31回文化財の保存修復に関する国際研究集会 「文化財を取り巻く環境の調査と対策」(④保06-07-1/1)

文化財はそれを取り巻く環境により様々な影響を受ける。ラスコー洞窟や高松塚古墳のカビ等発生の一つの要因は、壁画周囲の湿度が高かったことにある。これらの問題に対処するためには、劣化をひきおこす微生物への対策のみならず、周囲の温湿度や文化財に含まれる水分量など数多の環境要素の問題点を明確にすることが重要である。今回の国際研究集会では、様々な調査手法と評価法について、最新の研究成果をもとに討議し、文化財を取り巻く環境の調査と対策について詳細に検討した。

日 程：2008（平成20）年2月5～7日、会場：東京文化財研究所セミナー室、参加者数：56名

基調講演1：環境変動と野外遺跡の成立と保存—中国敦煌莫高窟を例として—

(Environmental changes and conservation of historic remains: case study of Buddhist cave-temples at Dunhuang Mogao Grottoes) 福田正己

基調講演2：Lascaux cave (France): A difficult problem of conservation

(ラスコー洞窟：その保存の困難さ) Isabelle PALLOT-FROSSARD (France)

セッションI：文化財を取り巻く環境と劣化

A geotechnical study for conservation of the Muryong Royal Tomb of the Baekje Dynasty, Korea (百濟王朝 武寧王陵の保存に関する地質工学的研究) 徐萬哲 Mancheol SUH (Korea)

高松塚古墳墳丘部の熱水分特性調査と冷却 (Thermal and moisture characteristics of the Takamatsuzuka Tumulus mound and its cooling) 石崎武志

Environmental monitoring as a decision making tool (文化財保存計画策定のための環境計測)

Vinod DANIEL (Australia)

セッションII：調査手法と応用事例

Lascaux cave: Monitoring of microbiological activity (ラスコー洞窟：微生物活動のモニタリング)

Genevieve ORIAL (France)

高松塚古墳・キトラ古墳石室の微生物調査：漆喰壁画の生物劣化にかかわる原因究明の一里塚 (Microbiological survey of the stone chambers of Takamatsuzuka and Kitara Tumuli: a milestone in elucidating the cause of biodeterioration of mural paintings)

杉山純多、木川りか

高松塚古墳の石室解体過程における温湿度環境の制御 (Control of temperature and humidity surrounding the stone chamber of Takamatsuzuka Tumulus during its dismantlement)

小椋大輔、犬塚将英

高松塚古墳墳丘部の原位置土質特性と安定解析 (Geotechnical properties of Takamatsuzuka Tumulus and its stability)

三村衛

Integrated non-invasive techniques for the diagnosis and conservation of mural paintings and other pictorial works (壁画・絵画の診断と保存のための非接触調査法)

Mauro BACCI (Italy)

音波による石造文化財の劣化評価 (Application of the hammering test and acoustic emission technique to stone cultural properties)

高妻洋成

セッションIII：環境の評価と対策

Effect of climatic load on the material properties of the Humayun Red Sandstone (フマユーン廟赤砂岩の物性に対する気象の影響とその解析)

Rudolf PLAGGE (Germany)

Prediction of the mold fungus formation probability on critical building components in residential dwellings (建造物部材でのカビ発生率の予測解析)

Rudolf PLAGGE (Germany)

The Lascaux cave and the climate change (ラスコー洞窟内の微気象変化とその解析)

Delphine LACANETTE (France)

総合討議：座長 三浦定俊

## 平成19年度 公開学術講座（調査・研究成果の公開）（④美05-07-2/5）

### 第41回オープンレクチャー「人とモノの力学」

当研究所では、美術史の研究成果を広く公表するために公開学術講座「オープンレクチャー」を秋に開催している。昨年度までは美術部の主催であったが、機構改革に伴い本年度より企画情報部が引き継ぎ、昭和41年度の開始より41回を数えることとなった。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日連続で開講し「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。

なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は、2日間でのべ276名の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、168名から回答を得た（回収率61%）。結果は、「たいへん満足した」105名、「おおむね満足した」60名、「不満が残った」5名を数え（複数回答2名）、回答者の97%が満足感を得たことがわかった。

第1日：2007（平成19）年11月2日（金）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・「光琳の目と手」江村知子（企画情報部）

京都の高級呉服商雁金屋に生まれた尾形光琳(1658-1716)は、俵屋宗達の影響を受けながら、すぐれた意匠感覚と写生に基づく迫真性を融合させて独自の画風を確立した。宗達絵画の特質の一つに豊潤な水墨表現があげられるが、宗達の影響を色濃く表す光琳の作品に「四季草花図」（津軽家旧蔵、個人蔵）がある。この作品の成立過程を辿りながら、光琳芸術の特質を考察した。

・「矢代幸雄の琳派観」中部義隆（財団法人和文華館）

和文華館は1960（昭和35）年10月31日、第一回展「開館記念名品展」の開会式を迎える。作品蒐集をはじめ、美術館構想を託されたのは、初代館長、矢代幸雄であった。この展覧会の58件の出陳作品には、8件の琳派作品が含まれる。この講演では、日本美術の国際的評価の向上に尽力した矢代幸雄が、琳派作品にどのような芸術性を認めていたかを考察した。

第2日：2007（平成19）年11月3日（土）午後1：30～4：30、東京文化財研究所セミナー室

・「矢代幸雄と美術研究所」山梨絵美子（企画情報部）

昭和5年7月、洋画家黒田清輝の遺言によって現在の東京文化財研究所の前身である美術研究所が開設された。このアジアで初めての美術研究所の具体像をつくったのが、ポッティチェリ研究のためにヨーロッパに留学し大正14年に帰国した美術史家矢代幸雄であった。矢代の構想、そして美術研究所を通して矢代が日本にもたらしたものについて考察した。

・「黒田清輝のフランス体験—芸術家村グレーから黒田記念館へ」荒屋鋪透（ポーラ美術館）

黒田清輝の画業および日本の美術制度への貢献に大きな影響を与えた、彼のフランス留学、とりわけパリ近郊の芸術家村、グレー＝シュル＝ロワンでの芸術体験とはどのようなものであったか。絵画に描かれた場所とそこに住んだ英国の作曲家ディーリアスの資料など、フィールド・ワークと周辺領域の渉猟を通して、画家の足跡を辿った研究方法を紹介した。

## 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 (①修06-07-2/5の一部として実施)

平成19年度は、近代化遺産の中でも航空機の利活用を主なテーマとして研究を行った。イギリスから、イギリス海軍航空隊博物館の主任学芸員兼主任技術者を、また国内からは元海上自衛隊に所属し、海から引き揚げられた旧日本軍機の修復作業を担当された方及び日本航空協会から所沢航空発祥記念館が所蔵している九一式戦闘機の保存修復に携わっておられる方を招いて、東京文化財研究所の地下セミナー室において、航空遺産の研究者の方々にご参加いただき、各研究者の視点から航空機の保存と活用に関する研究会を行った。

### 第21回「航空機の保存と活用」

日 時：2008（平成20）年1月25日（金）13：00～17：30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講 演 者：航空機の保存と活用

中山俊介（東京文化財研究所）

第2次世界大戦の航空機 博物館の展示品？アンティーク？遺跡？

デイブ・モリス（イギリス海軍航空隊博物館）

文化財としての航空機保存 九一式戦闘機を例として

長島宏行（財）日本航空協会

零式三座水偵の保存処理

平山助成（平山郁夫美術館）



講演の様子

## 国際文化財保存修復研究会（②セ01-07-2/5の一環として実施）

### 目 的

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人々の接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる国や地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、国際文化財保存修復研究会を開催し、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる情報交換の場を提供している。

### 成 果

平成19年度は、以下のとおり研究会を実施し、またその報告書を出版した。

テ ー マ：保存処置後のモニタリング

趣 旨：遺跡の保存修復、中でもそれを国際協力で進める場合には特に、事業が終了したらそれで終わるのではなく、その後のモニタリングを続けることが極めて重要である。本研究会では、実際に大規模な保存事業が終了して以降にも、有効なモニタリングが続けられている現場の情報を、参加者の間で共有する機会とした。

日 時：2007（平成19）年12月6日 10：30～17：00

会 場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：93人

講演内容：遺跡保存におけるモニタリングの重要性とその問題点

西浦忠輝（国土舘大学）

ポロブドゥール遺跡の修復後のモニタリング

ナハール・チャヤンダル（ポロブドゥール遺産保存研究所）

石窟庵の長期的保存方案

金思憲（韓国国立文化財研究所）

報告書出版 1冊 『第21回国際文化財保存修復研究会報告書』 07.3



発表風景



総合討議の様子

## 総合研究会 (④情)

総合研究会は各部・センターの研究者が各自、テーマを設定し、研究プロジェクトの成果を発表し、それに対して所内の研究者が自由討論する研究会である。総合研究会の開催は企画情報部が担当する。平成19年度は下記のスケジュールで実施した（会場：東京文化財研究所セミナー室）。また平成19年度から、独立行政法人国立文化財機構に対し、総合研究会の案内を通知することとした。

- ・第1回 2007（平成19）年6月5日（火）二神葉子（文化遺産国際協力センター）  
「文化財のGISデータベース化と地震危険度評価」
- ・第2回 2007（平成19）年7月10日（火）綿田稔（企画情報部）「宗湛の研究」
- ・第3回 2007（平成19）年10月2日（火）犬塚将英（保存修復科学センター）  
「文化財の調査のための新しいX線検出器の開発」
- ・第4回 2007（平成19）年12月4日（火）森井順之（保存修復科学センター）  
「磨崖仏の保存施設としての覆屋の評価」
- ・第5回 2008（平成20）年1月8日（火）勝木言一郎（企画情報部）  
「訶梨帝母（鬼子母神）の図像をめぐる“オリジン”・“オリジナル”・“オリジナリティ”」
- ・第6回 2008（平成20）年2月12日（火）鎌倉恵子（無形文化遺産部）「現代に生きる人形浄瑠璃文楽」
- ・第7回 2008（平成20）年3月4日（火）三浦定俊（副所長）「光学的方法の歴史と展開」

## 企画情報部研究会 (④情)

企画情報部では、ほぼ月に一度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、所内外からの参加者も交えた議論によってその充実を図っている。平成19年度は下記のような研究会が行われた。

- 4月25日 田中淳（企画情報部）「『太陽と仁丹』から一拡散するイメージと相対化する視点の可能性」
- 9月26日 中野照男（企画情報部）「敦煌文書の真贋をめぐる」
- 10月24日 江村知子（企画情報部）「光琳草花図の展開」
- 11月28日 田中修二（大分大学）「土田麦僊のクラシシズム——両大戦間期の日本画の方向」
- 12月26日 津田徹英（企画情報部）「平安末期の在地造像をめぐる小考」
- 2月27日 綿田稔（企画情報部）「聚光院問題を考える」  
渡邊雄二（福岡市美術館）「塔頭建築の障壁画展開における聚光院障壁画成立のコンテキスト」
- 3月26日 呉景欣（来訪研究員・UCLA）  
「古典か前衛か、キリスト教か仏教か —1920年代の古賀春江の宗教的なテーマの絵画」  
田中淳（企画情報部）「尾高鮮之助と岸田劉生」

そのほか、国際シンポジウムに向けての討議を13回（5月30日、6月13日、27日、7月25日、8月8日、10月3日、10日、11月14日、21日、12月12日、1月16日、23日、2月29日）にわたって行った。

## 保存修復科学センター研究会 (④保)

(1) 「木質文化財の劣化診断」

日 程：2007（平成19）年11月19日（月）

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：62名

講演者：文化財建造物の劣化診断と維持管理—診断例とその対策、今後期待される技術—

藤井義久（京都大学大学院農学研究科）

木彫像内部の生物被害を見る—文化財用X線CTによる非破壊劣化診断—

鳥越俊行（九州国立博物館）

温度による殺虫処理が木質文化財に与える影響の評価

Tom Strang（Canadian Conservation Institute）

(2) 「文化財の保存環境の研究—金属試験片曝露による環境モニタリング—」

日 程：2008（平成20）年3月3日

会 場：東京文化財研究所会議室

参加者：33名

講演者：金属の錆生成について

増子昇（東京大学名誉教授）

金属片曝露による文化財への影響試験の歴史

門倉武夫（東京文化財研究所名誉研究員）

空気環境モニタリングのための曝露試験の世界的動向

犬塚将英（東京文化財研究所）

空気汚染物質による文化財影響調査と評価の今後

佐野千絵（東京文化財研究所）



「木質文化財の劣化診断」研究会の様子